

浄土

monthly
JODO



1999

2

February

法然上人鑽仰会

テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは  **0088-82** (無料)
お客様センターへどうぞ
〔受付時間〕 9:00～23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

熊谷寺

熊谷

寺院紀行

寺に歴史あり。

人々に信仰あり。

日本の、心の故郷を紀行する。



▼熊谷寺本堂
第三十三世漆間和美住職と都子夫人





熊谷寺の本尊は阿弥陀如来座像



山門の前が旧の中山道だった



本堂向かって左手の蓮生法師
(熊谷直実) 廟

熊 谷
熊谷寺



クマガイ草と名付けられた花

源頼朝に「日本一の剛の者」と呼ばれた坂東武者熊谷直実の像は熊谷駅前立つ



熊谷寺の寺宝である蓮生法師の伏鉢



法然上人のもとを去り東国に向かう蓮生法師は、浄土のある西方に背を向けないため、馬に反対向きに乗って来たという東行逆馬の図



まさに荒れ川だった荒川。
左手が熊谷の中心部



六十年ぶりに復活した「かいだんめくり」。
かいだんは戒壇と書く



熊谷寺の最も古い建造物、鐘楼



熊谷寺第三十三世漆間和美住職

撮影・タカオカ邦彦

浄土

1999/2月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行「熊谷寺」	写真=タカオカ邦彦	3
選択集と日蓮聖人	大室了皓	8
熊谷次郎直実	梶村 昇	18
今月の表紙	三浦功大	23
寺院紀行 熊谷・熊谷寺	真山 剛	24
御法語に聴く	林田康順	34
連載 民間の伝統芸能と宗教 ④	川元祥一	40
応病与楽	大井潔空	46
さんぽの達人	山本勝之	52
コラム 仏教歳時記		58
Jフォーラム		59
誌上句会	選者=新宮不等号	60
事務局だより		69
編集後記		70



表紙題字=浄土門主 中村康隆祝下
表紙撮影=三浦功大
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

選
日蓮聖人
採集と

大室了皓

一、日本の宗教改革

選訳集は法然上人が浄土宗の立教開宗を宣言されたものであり、また日本仏教における宗教改革書でもある。

ドイツのマルチン・ルターは、カトリックの総本山であるバチカンのローマ教皇庁のレオ十世が、サン・ピエトロ聖堂改築資金を、免罪符の販売をもって補おうとしたことに抗議して、九十五か条の抗議書を発表した。これが教皇の怒りをかい、彼は破門されてしまった。これがきっかけとなって宗教改革の火ぶたがきられ、新教が起り以後キリスト教は、ローマ・カトリック、東方教会と新教の三つの流れになっていった。

なお免罪符の販売者たちは、

「お前たちは罪を改悔し寄進料を払えば、誰でも罪の許しが得られるのだ。お前たちの父は焰の中にいるではないか。お前たちはほんの僅かな金で彼らを救うことが出来るのではないか。だから金を出せ。買う氣を起せ。お金が箱の中でチャリンと音を立てさえすれば、魂は煉獄の焰の中から飛び出し、天国に舞い上がるだろう」

と言って売り歩いたというから、熱心なキリスト者であるマルチン・ルターが抗議書を出したのは、彼の止むに止まれぬ真情からであろう。そして教会と領主のキリスト教を庶民のものとしようとして、今まで聖書はラテン語であったものを、ドイツ語に訳した。時あたかもグーテンベルクの印刷機の発明に伴って、世に広まっていた。

当時の聖職者でもラテン語の読み書きが出来ない者が三人に一人はいったというから、ル

ターの英断は聖職者たちにも多くの賛同者が出たであろう。

このルターの宗教改革、言い換えればヨーロッパにおける宗教改革が行われたのは、法然上人が選択集を撰述して改革の宣言をされてから、三百年以上も後のことである。

上人はルターの三百年以上前に、貴族や一部の者のための仏教を、広く民衆のものとしたのである。まさに偉大な宗教改革であった。

伽藍、特に本堂の作りをみても、上人以前は本堂には庶民の席はなかった。それができるのは上人以後である。これは京都・奈良の古刹を見れば分かることだ。

この厳然たる事実からも、選択集のご撰述が如何に重大なことであるかが分かる。

二、仏教界に与えた影響

1、明恵上人

革命の書であるがために、このご撰述は仏教界を揺るがすことになった。

上人ご入滅の年には、戒律堅固であり学識ぬきんでた、華嚴宗の学匠でありまた当時の仏教界のリーダーの一人であった明恵上人は、今まで法然上人を深く尊敬しておられたが、選択集をつぶさに読んだ後、愕然とし、

「教典や論書の趣旨を惑わし、多くの人びとを欺く書だ」と猛烈に誹謗し、詳細な論陣を展開し反発されている。

その中から三つだけ取り上げてみたい。

選撰集に対する反対論を知ることにより、本集の重大な意義をあらためて認識することが、私自身できたからである。

● 菩提心について

菩提心は、仏道修行の基本である。

菩提心とは、多くの教典や論書に説かれていることを要約すれば、

「菩提」とは仏が修行の結果、得た智慧に他ならない。

「心」とは、この仏の智慧を願ひ求める心を起す。

この心をさして菩提心という。すべての仏法はこの心によって生じる。この心をおこすことがあらゆる修行の基本なのだ。

にも関わらず、選撰集では、菩提心の意義に迷い、み名を唱えることを取り上げて「正行」とし、菩提心を「余行」と名づけ、往生のための最も大事な「心」であるにも関わらず、二次的なものという間違った邪悪な説を述べて、人を誑かしている。

法然上人は、本集の第三章「弥陀如来、余行をもつて往生の本願としたまわす。ただ念仏をもつて往生の本願としたまえるの文」の中で、

「仏の国土は様々であり、それぞれの国土に往生するための行も様々である。

布施・持戒・忍辱・更には菩提心をもつて往生の行とする国土もあるが、ただ念仏を唱えることによって往生できる国土を阿弥陀如来は選ばれた」

と云うて、菩提心を限界のある小さな利益として軽んじているのは、絶対に許せないことだ。

菩提心を罵ることはすなわち、十万の全ての仏法を罵ることである。

● 口称念仏について

無量寿經に「かの仏をもつばら念じる」とあるが、このことは仏のみ名を口に称えることではない。これは心の中の觀想として取りあげているのだ。

善導和尚の考えは、仏のみ名を称えることを「念仏」と名づけているが、称えることだけが念仏だとは言っていない。

「念仏」とはまさしく心に仏を念じることをさす言葉である。

にも関わらず、汝は（法然上人のことを蔑んだ余りに出たのであろう）ただみ名を称えることだけを、この上ない大きな利益とするのは、天を地とし、地を天とするようなものだ。

● 聖道門について

善導大師の觀經疏に説かれている「二河白道」の譬えて、白道を歩き極樂淨土へ進んでいく念仏行者を呼び返す「群賊」をして「別解・別行・悪見人」と、暗に聖道門の修行をしてきた今までのインド・中国・日本の解行學見の立派な人達を貶し、聖道門を捨てた選択集は絶対に許すことができない。

2、日蓮聖人

親鸞聖人も選択集によって大きな影響を受けた方だが、それ以上の影響を受けた人は日蓮聖人をおいて他にはないだろう。

聖人が有名な立正安国論を撰述されたことはよく知られている。

これは聖人三十九才、選集撰述五十年後の作である。

● この時代には、天変地変・大地震・火災・大雨洪水・飢饉・疫病などが起こり、牛馬巷に倒れ骸骨道に満ち、大半の住民が死に、その遺骸が路上に放棄されたままになり、死人・小児・病人の肉を切り取って、魚や鹿肉に加えて売る人も出てきたという悲惨な事が起きていた。

これを嘆いた聖人は、この世を救うためには、世間にはびこっている邪教を無くして、正しい仏法を広めねばならない。邪教に迷わされて、国を守るべき神や仏を敬う人がいなくなったために、この国を嫌って他へ去ってしまった。だからこのような悲惨な事が起るのだ。

● その邪教の最たるものは、念仏の教えであるとして、安国論では徹底的に選集を攻撃されている。

浄土宗の私からみると、安国論は選集攻撃のために書かれたものではないかという錯覚さえ持つのである。

禅・真言・律宗等への反論はほんの僅かであって、殆どは選集に対してであるから、なおさらその感を深めてしまう。

短い論書であるにもかかわらず、その中に九回にわたって選集の名が出てくる。

その反発の中から、いくつかを取り上げてみると、

● 「後鳥羽院の御世に法然という人あり、選集を作った。これによって釈尊一代の聖教

を破り、あまねく十万の衆生を迷わせた」

として、聖道門の教えを捨て浄土門の教えだけを選んだことは許せない。

● また、二河白道の譬えをとりあげ、浄土への道（白道）を進む念仏者と呼び返す者は、群賊であるとして、念仏の教えに対して、これと異なった考えを持つ者を罵った。

これはインド・シナ・日本三国の聖僧や、十万の佛弟子を罵ったことで、絶対に許せない。

教主釈尊を忘れて西方浄土の仏のみを尊び、浄土三部経のみを専らにし、他の釈尊一代の教えをなげうった。

法然は、本当の教えを忘れた善導を阿弥陀如来の化身として崇めるような過ちをおかし、その流れをくんだ愚か者である。

● 無量寿経の十八願には、正しい法を誹謗した者を除くとあるではないか。法華経第二に「正しい法を誹謗したものは阿鼻地獄に落ちる」と説かれている。だから念仏者は地獄落ちなのだ。

● とにかく、難行を捨て、定散の門を閉じ、聖道門を開き（さしおき）、難行を抛つ（なげうつ）ことを教え広め人々を惑わした罪を許すわけにはいかない。

● そして「建長寺、寿福寺、極楽寺、大仏、長樂寺等の一切の念仏者・禅僧等が寺塔をば焼きはらいて、彼らが頭を由比の浜にて切らずば、日本国必ず滅ぶべしと申候おわんぬ」とまで叫ばれたという。

● ここまで考えてくると、立正安国論は選択集に対する攻撃書である。つまり選択集が

なければ立正安国論は書かれなかったに違いない。

しかもこれが日蓮宗の立教開宗の宣言書であり、宗の基本をなす聖典として大切にされているから、選撰集が無ければ、日蓮宗も無かったかもしれない。日蓮宗が無ければ、現在の創価学会ができるはずがない。政界では公明党も無い。

とすれば現在の政界のありようは全く違ったものになっていたはずだ。

選撰集が、現在の日本の現状にまで及ぼしている影響の大きさを、改めて考えるのである。

三、日蓮聖人を救った浄土宗僧侶

聖人の説は極めて過激なものであったために、鎌倉幕府を初め他の仏教者から猛烈な反撃を受け、様々の法難が降りかかり、伊豆へまた遠く佐渡へ流されたりして、苦しい日々を送られることになってしまった。

しかし文永二年三月、赦免状が届いたので佐渡を去って鎌倉へ行き、再び幕府に対して、法華経だけが正法であり他は邪教である。その最たるものは念仏だから、これを潰すようにと申し入れたが聞き入れられなかったのだ。

「三度国をいさめんに、もちいずば国を去るべし」

といつて身延の山に入られたが、山のすさまじい寒気と質素な生活は聖人の体を蝕むことになり、持病の「瘦せ病」がひどくなり、九年間過ごした身延を、弘安五年九月八日下りて池上へ向かうことになった。

これは聖人の最後の旅であり、重い病に悩み死をも覚悟のものであった。

日を重ねて九月十七日には、大和市瀬谷に泊まり、翌日の十八日の昼頃に池上に入られたことになっているが、瀬谷から池上までは八里半の道のりであるから、朝発って昼に到着できる距離ではない。しかも重病人にとっては不可能である。

実際は、十八日の夕方になって洗足池付近に着いて休息し、闇の中を池上に向かう途中で道に迷い、大井篠谷まで来て従者が宿を探したところ、幸いに寺を見つけた。

ところがその寺は浄土宗であった。他に探すべき宿はないので、断られることを覚悟で窮状を訴えたところ、住持は意外にも快く一行を迎え入れ丁重にもてなして、一夜の宿を提供した。

感激した聖人は、翌朝出発に当たって大切にしていた念持佛の鬼子母神像を、お礼として住持に贈った。

その寺は万福寺という。これが縁となって現在でも万福寺と池上本門寺とは親しいつき合いがあるという。

同寺は室町時代に荒廃し、禅寺となり現在の馬込に移ったが、本尊は善光寺式の阿弥陀三尊である。

境内に「日蓮聖人參籠祈願之靈跡」と記した石柱があり、本堂内には聖人が礼に贈った鬼子母神像が祀られている。

十九日の朝、万福寺を後にして、昼頃池上に入られたのである。

前夜を浄土宗の寺で過ごされたこの事は、日蓮宗の書物のどこにも記されていない。

それから一か月も経たない翌月の十三日に亡くなっているから、余程の重体であつたと思われる。

万福寺の住持が、聖人が念仏を仏法の敵として激しく攻撃していた事を知らない筈はない。

もし「念仏の仏敵・憎き日蓮よ」と宿を断られて、野宿することになったら、季節は新暦では十月の末だ。重体の聖人はどうなっていたか分からない。

私は法然上人が「どの宗も立派な教えである。決して他宗を貶してはならない」と弟子達を誡められた、その教えが住持にも受け継がれていたのではないかと思い、聖人を助けた住持に敬意を払うと共に、あらためて法然上人を元祖と仰ぐことの幸せを感じるのである。

人の運命は皮肉なものだ。

選択集・念仏を仏敵として、生涯に渡って攻撃し続けた日蓮聖人の、生涯の最後の宿を提供し、手厚くもてなしたのは浄土宗の寺であつたとは。

(東京・光取寺住職 本誌編集顧問)

念仏の豪の者

熊谷次郎直実

梶村昇

(一) 直実の発心 はっしん

熊谷直実と平敦盛の話は、浄瑠璃「一の谷嫩軍記や謡曲「生田敦盛」などで、長く人々の口に語り伝えられてきた。それだけ人々の琴線に触れるものがあつたからであらう。『平家物語』はその時の直実の苦衷をこう述べている。

その日の朝、熊谷直実は格好の敵を求めて磯づたいに馬を進めた。すると黄覆輪きふくりんに鞍を置いた武者が一騎さつと海へ打ちいった。直実は叫んだ。「敵に後ろを見せさせ給ふな、返させ給へ」と。武者は取つて返し、汀ぎがで両者は組み合いとなった。直実が組み敷いて見れば、なんと年十六、七の端正な若武者ではないか。直実にはわが子ほどの者である。この子にどうして刀を立てることができようか。助けようと思つて後を見れば、土肥や梶原ら、味方の軍勢が五十騎ほどこちらに向かつてやつてくる。とても

助かる見込みはない。それならばわが手にかけて、と泣く泣く頸を取つた。直実は、あはれ弓矢取る身ほど口惜くちをかりける者はなし。武芸の家に生れずば、何とてかかる憂目うれめをば見るべき。

と言ひ、袖を顔に押し当ててさめざめと泣いた。「それよりしてこそ熊谷が発心はっしんの思ひはすすみけれ」。

と。ところが直実の出家について、鎌倉幕府の記録である『吾妻鏡あづまがたみ』は、こんな話を伝えている。

戦い終わつて故郷熊谷に帰つた直実は、留守中に叔父の久下直光くげなおみつが、直実の所領の一部をかすめ取つてゐることを知つた。話合ひをしても埒らちがあかず、ついに頼朝の前で裁判することになった。しかしこれは最初から叔父が、幕府の実力者梶原景時と仕組んでのことだったので、結果は火をみるより明らかであつた。それを知つた直実は怒り心頭に発し、持参した証拠書類を頼朝

の簾すだれの中に投げ入れ、西の詰所せきどで髻むすを切つて、そのまま行方をくらましてしまった。幕府は慌てて八方手をつくし「直実が前途を遮さかつて、遁世の儀をとどむべきの由」仰せられた。

というのである。幕府は所領の訴えさえ満足に裁けず、ここで坂東一の豪傑に出家されたとあつては面目まるつぶれになるので、必死に行方を探したのであらう。

ところが出奔して四か月、直実は狼狽する鎌倉を横目に、上洛して法然上人を訪ねている。建久四年（一一九三）春、この時、直実五十三歳、上人六十一歳であつた。

『平家物語』と『吾妻鏡』と、どちらが直実の出家の真因かなどという論議があるが、人の行動はそれまでの人生の決算であつて、いずれか一つと決められるようなものではない。ただ言えることは、彼にはすべてのことが空しく感じられたのではないかということである。命を的に戦い、一所に命を懸け

て働いたが、それが何であつたのか。騙しあひ、足を引っ張り合ひ、人を掻き分け、押し退けて、何をしようとしているのか。すべて虚仮、空言・戯言たふしごとで、真実なるは何もないではないか。真実の心境はこのやうなものでなかつたかと思ふ。

上人は直実の話を聞き、

罪の軽重をいはず、ただ念仏だに申せば往生するなり、別の様なし。

と言われたという。「罪が軽い重いのこと言わず、ただ念仏さえ申せば極楽に往つて生れることができる。そのほかに別の手立てはない」というのである。聞き終わつて直実はさめざめと泣いた。

自分は命をも捨て、手足をも切らなければ、後世は助からないと思つておりました。それでもそう言われれば、そうするつもりでおりました。それが只今のお話では、ただ念仏さえ申せば往生すると、やすやすと仰せられましたので、あまりのうれしさに

泣いてしまいました。

と言った。虚仮こけの世に真実まことなるものがあることに気づかせられたのであろう。今風にいえば、永遠なるものとの関わりに目覚めさせられたということであろう。弥陀の名を呼び、極楽を憶念する。それに常往なるものを感得した。こうして蓮生れんせい熊谷直実くまがやちしつは誕生した。

(二) 直実を彩るもの

直実にはたくさん逸話えきわがあるが、どれも彼の面目躍如めいもくえつじょたるものがある。

念仏者は「行往座臥ぎやうぶざふし、西方さいほうに背を向けず」という教えがある。念仏者はどこにいても、西の方弥陀の浄土には尻を向けないという教えだが、彼はそれを厳守して、京都から関東へ下る時でも、西に当たる京都に背を向けないように、馬の鞍をさかさまに置いて、顔を京都に向けたまま、後退あしひきりするように関東まで下向したという。そして、

浄土じょうどにも剛ごうのものとや沙汰すらん西に向

ひてうしろ見せねば

と詠んだという。向かうべきものにはうしろを見せないという世俗での豪傑ぶりが、念仏の世界にそのまま出たのであろう。有名な「熊谷の逆馬さかうま」の話である。

傑作なのは、今、京都の嵯峨せいごの清涼寺に、重要文化財となつて残っている熊谷直実自筆の誓願状である。それは「僧蓮生願を起こして申さく」という書き出して、次のようなことが述べられている。

私のような者が極楽に往生できるのは、何よりも嬉しいことだが、どうせ生まれさせて戴けるなら、再びこの世に帰つて、衆生を極楽に導くことができるという最高の場所、上品上生じやうほんじやうじやうに生まれさせて戴きたい。それ以外の所ならご遠慮申しあげたい。このような願いがいかに無理なことか、重々承知しているつもりだが、それでも他の場所なら生まれたいとは思わない。それはできないといわれるなら、阿弥陀さ

まよ、あなたはすべてを救いとると約束しながら、それを破ることになりませんか。

慈悲深いといいなから、慈悲が欠けたことになりませんか。お釈迦さまよ、あなたは『観無量寿経』で、十悪五逆というような悪人でも十たび念仏を称えれば往生できると説かれたではありませんか。

という具合に、阿弥陀さまから釈尊、善導と次々に脅迫めいた言葉を連ねて、極楽の上品上生に生まれたいと願っているのである。そして最後には一転して、

大聖の金言がどうしてむなしいことがありましようか。自分は疑いなく最高の場所に往生できると確信しました。

と記している。弥陀や釈迦を脅かしたりすしたり、まことに恐れ入った誓願である。

直実の生涯は豪傑という言葉に尽きる。しかしその豪傑が私たちの心の裏に響くのは、彼の心底に湛えられた純情さにあるのであろう。武人であって詩人、つわものであって念仏者、それが彼の真骨頂であり、いつまでも慕われるゆえんであろう。

承元元年（一二〇七）九月四日、彼は自分の最期を予告し、衆人注目の中で大往生を遂げたという。六十七歳であった。最後の最期まで豪傑の念仏者であった。

（亜細亜大学名誉教授・浄土宗総合研究所客員教授）

今月の表紙

酔妃蓮

蓮

LOTUS

2月

池の中に蓮華あり

大如車輪

青色には青光あり

黄色には黄光

赤色赤光

そして白色には白光ありて

微妙香潔なり

舍利弗よ

極楽国土には

かくの如くの

功德莊嚴が成就される

蓮華

この不思議

たとえ七寶池八功德水なくとも

小さな泥田に

咲く

美しく咲いて

いる

ハスの化石

ハスがいつの頃から地上に発生したかは、不明であるが、被子植物（花びらを持つ植物）の中では、最も古く現われたものの一つである。白亜紀中期（一億年～八千万年前）のハスの化石は主に、シベリア、アメリカ・ヨーロッパの北半球から出土している。わが国では、北海道、福井県、京都、佐賀県などからハスの化石が出土していて、福井県池田町血尾出土の化石は、中生代白亜紀末期（八千万年前）のもので、「トウヨウハス *Nelumbo orientalis*」と名づけられ東アジア最古である。

表紙写真と文

三浦功大

1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の語」を毎年発行・責任編集（現在3号までに至る）していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」（西田書店）、「蓮の文庫史」（カド創刊）などがある。

熊谷寺

寺院紀行

熊谷

熊谷寺

文／真山剛
撮影／夕力才力邦彦

熊谷寺本堂



平安末期から鎌倉時代にかけて関東一の武者として名を馳せた熊谷直実。その武勇に猛たることは保元、平治の乱、そして歌舞伎の熊谷陣屋で有名な一ノ谷の合戦と数知れず、主君源頼朝に「日本一の剛の者」とまでいわせしめた程である。

その直実は流鏑馬での配役への不満や領地争いで、の不当な裁判への憤り、そして過去の合戦での数知れぬ殺生への懺悔から出家、法然上人のもとへ教えを請いに上京した。そして上人の念仏往生の教えに導かれ、法力房蓮生の名をもらう。

上人のもと京都に三年とどまったのち故郷の熊谷に戻り、以後念仏第一の余生を送り、法然上人に「坂東の阿弥陀仏」と誉め讃えられた。まさに当時の傑出した人物の一人である。

もちろん、まつわるエピソードも数知れない。

前半生での武勇では、実子直家とともに宇治川の橋桁を渡り、また一ノ谷の合戦では仕方なく討ち取った若武者敦盛の首をその父に青葉の笛とともに送った。また領地裁判ではその場で不服とし自ら髪を落としたという。

出家してからの後半生では、京から下る時に浄土のある西方に背を向けぬため馬に逆さに乗った東行逆馬、その途中で山賊に路銀を与えたために口から光輝く念仏を出し、それを質に金を借りたこと。そして自らの往生を予告し集まった民衆の中で高声念仏一しきりの



熊谷直実出家像。いくつかの出来事で出家を決意したと言われている

後に往生した話と、関東武者熊谷直実としても念仏行者法力坊蓮生としても今に語り継がれる話はまだまだある。

もちろん熊谷直実や蓮生法師のいろいろな資料を見ると諸説あるものの、その人間としての魅力に何らかわりはない。

今回訪れる熊谷寺はこの希代まれなる人物、熊谷直実の生まれた地であり、また往生した地でもある。観光客あふれる寺院を想像して新幹線に乗り込んだ。

きれいに整備された熊谷駅の前には鎧武者姿で馬にまたがる直実像が立っている。歩いて約十五分、もと中山道の一方通行の道から山門に。さて入ろうとするが山門には柵があり入れない。隣の駐車場にも柵がある。さては入口は逆かと回ると、隣は神社の境内だ。さて困った、もう一度、正面に戻ると奥様が迎えに出てくれた。約束の時間ちようどになったのだ。

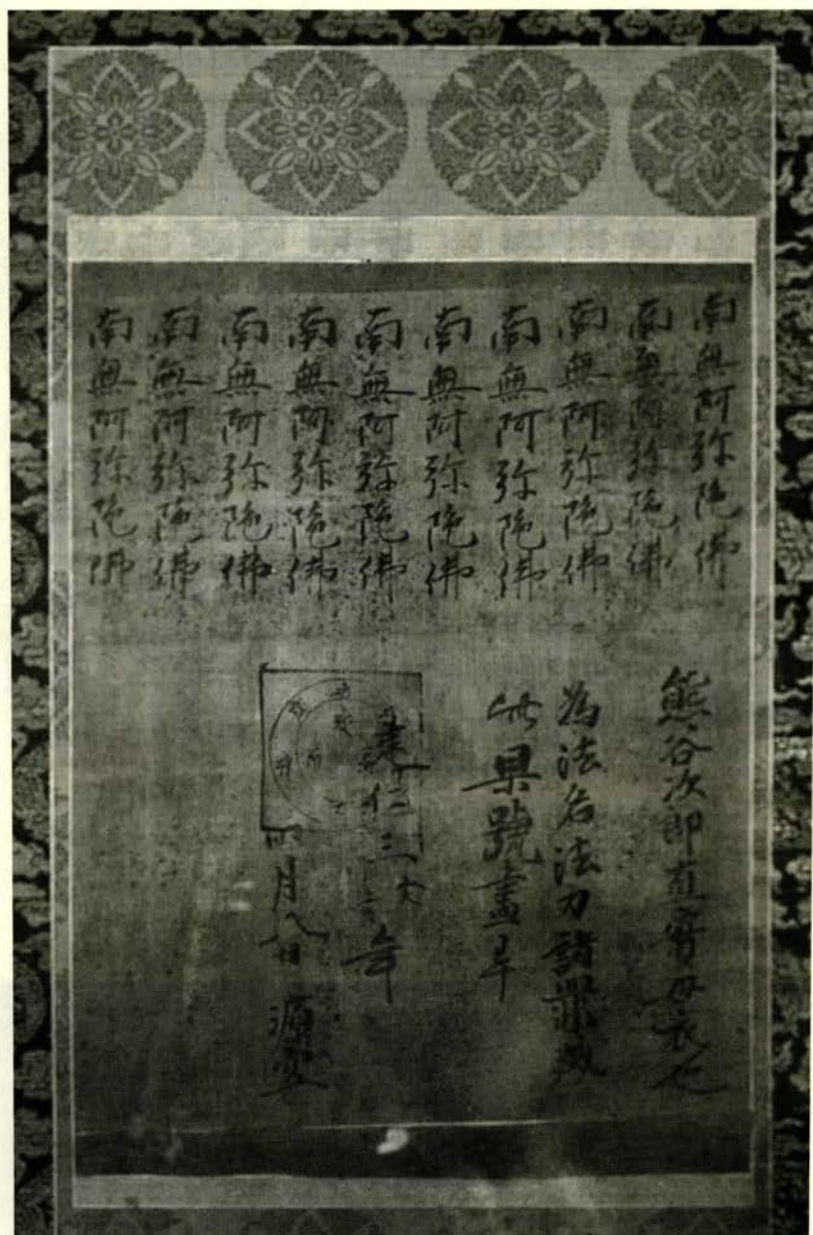
挨拶の後、「今引越しの準備をしている最中なんです、なかなかほかどらなくて」と熊谷寺第三十三世漆間和美住職が言う。

昨年八月に住職の認証を受けたばかりの住職夫妻は客殿隣の庫裡へ引っ越しをする準備中だったのである。漆間住職はもと中学校の英語の先生。奥様は中学の保健の先生だったそうで、ご夫婦は寺からすぐの所に住んでいて、法事などの時だけ寺に来るという。

それ以外の時はいつも門が閉められている。観光寺院という予想



蓮生法師が使った数珠。かなり大ぶりの数珠だ



法然上人筆の名号。貴重な寺宝のひとつだ

は見事にはずれた。

いただいた資料にも、一般の境内拝観は日曜日の午前九時から午後四時までと明記してある。

関東大震災、そして太平洋戦争という天災、人災から逃れた間口十四間、奥行十六間の本堂、宝篋印塔の蓮生法師の墓、法然上人筆の名号、蓮生法師が使った数珠などの仏具、その他数え切れない什宝の数々、そして珍しい戒壇めぐりもある。観光寺院としての要素は十二分に兼ね備えている。

住職に案内されながらも、最初の子想がなかなか消えない。

山門前には地元の大手デパートがあり、人通りも絶えない。大通りも目の前だ。確かに住職が言うように、熊谷は観光地ではないし、「直実の精神だけが生き続けている」のかも知れないが……なぜ。そんな疑問は取材後に解けた。二人いるご子息のうち、東京に住む弟さんが僧侶の資格を取り寺の手伝いをしてしていると取材中に聞いたことを思い出し、その友人に話を聞いたのがきっかけとなった。住職の次男淳郎さんはインターネットで熊谷寺のホームページを開いていて、その「直実ブームを取り巻く現状」という法話もどきのひとり言というメッセージにその疑問の答えがあったのだ。

その答えの前に少し熊谷に触れておこう。

熊谷は埼玉北部最大の町で、人口はおよそ十六万人。昔から東北

回遊式の名庭園、星溪園。写真は荒川の洪水でできた玉の池



方面の交通の要所で木綿市などで栄え、江戸に入ってから宿場町として、また幕府の直轄地としてにぎわった。しかし熊谷で特筆すべきはやはり、直実を生んだ熊谷氏を始めとする武士団だ。藤原氏の勢力衰退に伴い関東地方にも多くの武士団が作られ、なかでも坂東八平氏と武蔵七党がその忠誠勇武で全国に名を馳せた。

平姓を名乗った坂東八平氏には畠山氏や河越氏が、そして武蔵七党には児玉党、横山党、私市党きさいなどがあり、熊谷氏は私市党に、熊谷氏が安芸に移ってから熊谷の地を治めた成田氏は横山党に属していた。

熊谷の地名の由来には諸説あるが、直実の父、直真がこの付近にいた大熊を倒したことからも言われている。とにかく貴族社会から武士社会へと変わるなかで、熊谷氏を始め質実剛健な関東武者の果たした役割は計りしれず、地元民が蓮生法師となった直実より、関東武者の熊谷直実を慕うことは駅前駅前の像にも現れている。

さて、もうひとつ熊谷の歴史を語るのに忘れてならないのは荒川である。荒川はその名のごとく荒れ川で、熊谷市史の年表を見ると氾濫記録が目を引く。

土手長し 日長し鐘は 熊谷寺 芭蕉

松尾芭蕉がこう読んだのは関東の名所、熊谷堤の桜だが、荒川はこの見事な桜並木の堤を決壊させ、また多くの人々の家屋をそして

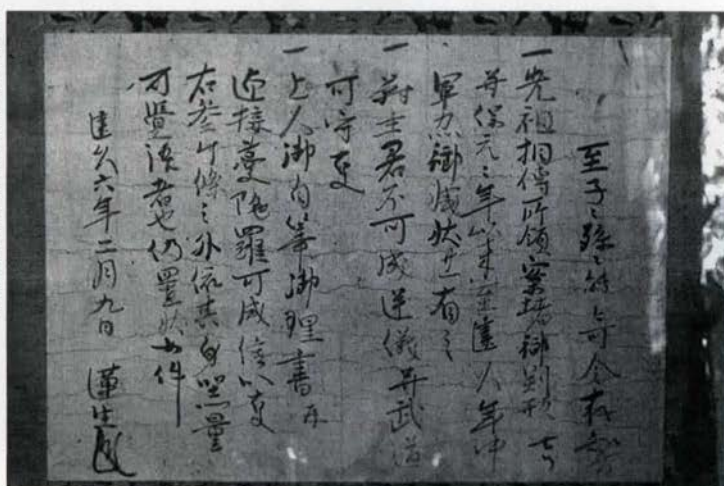


熊谷駅の北にある熊谷スポーツ公園のラフビー場

蓮生法師、自刻の像



蓮生法師が子孫に書き残した書簡状



命を奪ってきた。

明治になってからも氾濫は治まらず、洪水の心配がなくなったのは昭和三十年代後半に上流にダムができてからだ。熊谷市民は随分長い間、荒川に悩まされ続けてきたのである。

確かに関東の寺院を取材するとしは川の話が出てくる。関東地方の開拓の歴史は川との戦いでもあるが、熊谷はまさにその典型だといえる。

その熊谷の名物といえば、皮肉なことに荒川の氾濫でできた玉の池のある星溪園、お菓子五家宝と熊谷直実、そして熊谷寺だが熊谷寺は「ゆうこくじ」と読む。なぜ「くまがや」と読まないのかと住職に聞いてみたが、その理由はよくわからないという。

もともと地元では上町にあったことから上寺かみでうと呼ぶそうだが、「熊谷のくまがやでら」より「熊谷のゆうこくじ」の方が語呂はいい。

さて、「くまがや」から「ゆうこく」寺に話を戻そう。

住職の次男淳郎さんが開いている熊谷寺のホームページの昨年九月付けのそのメッセージには、ここ一年の熊谷直実ブームに触れたあとに直実を商品として使う悪質な人々の実態に触れている。

熊谷直実の書物や資料集を編集すると言って寺の貴重な資料や写真を借用しつつ無断掲載されたこと。無断で本尊や墓所をビデオ撮影されたこと。また山門の外ではあるが、あたかも寺のもののように

に掲示された寄付金の表示など、である。

どうやら熊谷寺はその魅力ゆえに随分ひどい目にあつてきたようである。そうした苦い経験が拝観を極端に規制する原因になったに違いない。

お寺はいつでも入れるものと私たち一般人は考えがちだし、境内散策にしてもまるで公共施設の気軽さで歩いてしまふ。しかし、税金で作られる公共施設と寺院は違う。いくら私たちに公開しようとしても、礼儀や常識を守らない者には門戸を開けないのは当然である。偽直実ファンや全国の直実ファンの中の何人かの心ない人のために、熊谷寺はその門を狭めざるを得なかったのである。

さて、その熊谷寺にいま大きな動きが生まれつつある。

昨年六月の六十年ぶりの戒壇めぐりの公開に始まって、熊谷ブームの一環であり、住職も講義した「熊谷次郎直実(法力房蓮生法師)の研究」と題した市政六十五周年特別講座、そして九月に本堂で演じられた地元熊谷歌舞伎の会旗揚げ公演『熊谷陣屋』。

さらに十月にはかつては関東を代表する催しだったという開山忌が四十年ぶりに開催され、住職のアイデアで薩摩琵琶による「平家物語・敦盛最期」が演奏され、二百五十枚の整理券を上回る人出の盛況となった。

こうした熊谷直実、あるいは蓮生法師に関わる催しは寺だけでなく



蓮生法師が往生を予告した札を立てた村岡の辻。現在は公民館と板碑が立っている

く、熊谷市、地元の人々、そして檀信徒の思いによって行なわれている。町中を歩いてみたが、直実と蓮生法師にまつわる史跡や神社はかなりの数にのぼる。熊谷寺を中心に観光ルートも充分に作れる程だ。

こうした中で、住職は地元の人たちや檀信徒の人たちとのさらなる交流をはかるために、そして名利をより良い形で後世へ伝えるためにと庫裡へ引越すのである。

蓮生法師の結んだ庵から始まり、天正十九（一五九一）年幡随意上人がその徳を慕い、多くの浄財を集め蓮生山熊谷寺としたこの名利が、いままた改めて大きく一步を踏み出し始めている。

蓮生法師に関連する寺院は全国にある。法然上人の生誕地の岡山の誕生寺、西山浄土宗の本山、京都の粟生光明寺、娘玉鶴姫の供養のために建立した長野の熊谷山仏導寺など両手を優に越えるが、その中でも中心的存在である熊谷寺だけにこうした動きにも自然と全国からの注目が集まるに違いない。

そしてそれを一番知っているのは今年六十六歳を迎える漆間住職だ。一般社会ならもう定年隠居の年齢だが、漆間住職の第二の仕事はいま始まったばかりだ。

（ルポライター）



熊谷寺の全景。境内の広さは四千五百坪

御法語に聴く

初めに勝劣の義とは念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり、次に難易の義とは念仏は修し易く、諸行は修し難し

（『選択集』第三章）

ぼんば
凡夫の常識は仏の非常識

難しいものが素晴らしいの？

難しいものが素晴らしいの？

みんな救われることが素晴らしいの？

「難しいものが素晴らしい」これは私たち人間（凡夫）の側の常識です。私たちが暮らすこの世界での常識といってもいいかも知れません。

一生懸命勉強していい成績をあげる。

一人一人のこうした日々の努力の積み重ねによって、社会全体がよりよい暮らしや幸せを手にする。今日、私たちが豊かな社会に暮らせるのも、こうした努力の積み重ねをご先祖さま方が大切にして下さった賜物でありましょう。なんともありがたいことです。

「みんな救われることが素晴らしい」これは仏さまの側の常識です。私たちのような弱くはかない存在をなんとかして救いたい、そんな大慈悲をもったみ心から生まれた常識です。

凡夫の常識から仏さまの常識へ。法然上人による浄土宗の開宗は
仏教の主人公の大転換でした。これまでの仏教の立場は「難しいも
のが素晴らしい」という私たち凡夫の常識に基づいた行の選び取り
でした。

難しい諸の行⇨勝れた功德⇨勝れた人に用意されている

易しいお念仏⇨劣った功德⇨劣った人に用意されている

こんな図式です。もちろん、法然上人にも易しい行がなかった訳
ではありませんが、そうした行は劣った人に用意された劣った功德
しかない行に他ならなかったのです。

けれども法然上人は、すべての人々を救おうという阿弥陀さまの
大いなる慈悲にお気づきになられ「すべての衆生が救われることこ
そ素晴らしい」という仏さまの常識に基づく行の選び取りへとその
視点を百八十度転換されたのです。そして法然上人は、すべての人々

の救われる道、お念仏の教えをお広めになりました。

けれども、なかなか法然上人の教えの真意が分からない当時の仏教者たちはこう考えました（頭でつかちになつてしまった私たちも同様ですが）。「坐禪や止観など他の難しい行に比べれば、易しいだけのお念仏などたいした功德のあろうはずがない」と（こうした指摘は人間の有限性を弁えない傲慢さから生じる考え方に他ならないのですが）。彼らの理屈はこうでした。なるほど法然上人のいうようにお念仏には勝れた功德があるかもしれない。けれども、易しいお念仏にそれだけの功德があるならば、私たちの難しい修行はそれを凌ぐ「妙勝行」であり、「超勝行」であり、「秘勝行」である、と。所詮、これまでの仏教界の常識に留まつている限り、易しいお念仏は易しい故に劣った功德しかない行であるという位置は微動だにしないのです。

しかし、それではいつまでたつても阿弥陀さまの信心を正しく伝えてゆくことができません。

そこで法然上人は、冒頭のお言葉を通じて、次のようなことをお示しになろうとされたのでしよう。

阿弥陀さまは、煩惱にまみれたすべての人々を救うにはどうすれば良いものかと五劫もの間お考え下された。易しいお念仏ならばすべての人々にも称えられよう、ただし易しい行には小さな功德しかない、何とかしてその易しいお念仏に他のあらゆる行でさえ足下にも及ばない（全く比較に非ず）勝れた功德を込めなければならぬ、と。そして、ほとんど不可能とも思われるこうした難事を本願として誓願され、兆載永劫のご修行の末にそれを成就なされた。このように、たとえ易しいお念仏であつたとしても易しいからこそ阿弥陀さまが選り取られてあらゆる功德を込めた勝れた行となり、一方、

たとえ難しい行である諸々の行であつたとしても難しい行であるが故に阿弥陀さまが選り捨てられ厭われた劣つた行となつたのだ、と。

難しい諸の行Ⅱ劣つた功德Ⅱあらゆる人々に通じないから

易しいお念仏Ⅱ勝れた功德Ⅱあらゆる人々に通じるから

これまでの仏教界の支配的常識を百八十度覆すこととなる驚天動地の勝易念仏の成立でした。お念仏の「ひとりだち」です。

もちろん、ことのほかお優しい法然上人です。無益な論争をお嫌ひになつて、冒頭のお言葉をはつきりお示しいただいたのは唯一『選択集』のみですが。

合掌

(大正大学講師 林田康順)

民間の
芸能と宗教
伝統
④

連載

伝統芸能研究・千町の会代表作家

川元祥一

被差別者になつた 仏教者「放下」

一、口承文化と文字文化の擦れ違い

現代私たちは文字を使うことに何の違和感もないし、疑問をもつこともない。とはいえ日本人のすべてが文字に親しみ、それを使うようになったのはごく最近のことだ。

国民皆字制ともいわれる学校教育が始まったのは明治時代初期のころ。学校令が制定されて地域の小学校から国立大学までの教育体系が出来たのが一八八六（明治十六）年である。わずか百二十年たらずの歴史しかないのだ。日本の文化や歴史を考えると、このことを忘れてはならない。

かといってそれまで日本人が文化を持たなかったかというところと反対で、日本人の多くは、ことに農・山・漁村で働く者は、そのながい歴史の中で水準の高い文化をもっていた。このこともまた忘れてはならない。明治初期に欧米文化を模倣して政府が学校制度を制定したとき日本各地の農民は「百姓に学問はいらない」と反対し、反乱を起したところもある。その反乱の根拠は、文字を持たなくてもやってきた高い文化があったことを示している。

もちろんだからといって文字文化を否定したり軽んじたりするつもりはない。文字文化のすぐれたところは、今さら私がここで書く必要もないくらいだ。現に私は、文字を使ってみなさんとのコミュニケーションをはかっている。

このような現代を否定するつもりはないが、日本では、いや世界的に見ても、文字文化と口承文化（無文字文化ともいわれるが、私は口承という言葉を使う）の擦れちがいは実に大きい。ヨーロッパの植民地主義者はアフリカ大陸の南部大半を「暗国の大陸」といった。これは文字を持たない国という意味だった。そして文字を持たないのは文化を持たない野蛮な国として植民地化を正当化した。「我々が文化を教えてやったのだ」と。しかし植民地解放運動の中であきらかになったように、文字を持たなかったアフリカ大陸南部の国々は、

それぞれ独自の、そして水準の高い口承文化を持っていたのである。

日本人もまた、明治維新以後の富国強兵、植民地主義の時代に、同じ理屈を使ってアジアへの侵略を正当化した。今でもその正当化は克服しきれていない側面をもつが、日本もまた、ことにその大衆の大半はながいあいだ口承文化であったことを考えれば、植民地主義者の考えがまちがっていることがわかる。

文字を持たない国を「暗国の大陸」としたのはまちがいだ。また文字がないから文化がないとか文化水準が低いとする考えもまちがっている。文字文化と口承文化はそれぞれ独自性をもちながら対等なのだ。このことが最近の文化人類学でやつと主張されはじめた。当然の主張であるが、しかしそれでもなお今でも、文字を持たない国や民族、あるいは人々を遅れているとか水準が低いとする考えは、日本のアカデミズムの中に根強いのが現状だ。

二、文字文化としての仏教と日本人

日本における仏教を考えると、ここにある擦れ違いは無視出来ない。非常に重要な意味をもってくる。

よく知られているとおり日本の文字は中国から伝わった。二、三世紀には伝わっていたと考えられているものの、それが社会的に活用されるようになるのは五、六世紀からだろう。しかも当時中国から伝来した文字は日本の貴族たちが、特権階級としてそれを独占し、特権階級としての政治・行政に使い、ステータスシンボルにしたし、道具にもした。

六四五年に始まった大化の改新にしても、中国の文献を活用し、その文字を理解出来る者のみ政治・行政のリーダーになり、文字を持たない伝統的文化にいる者を「無学文盲」と差別した。

ほとんど同じ傾向や事例が、文字文化として伝来した仏教にも起っている。そしてこのことが日本仏教の一つの特徴をつくったといえる。そしてまた、その後文字文化の大衆化と仏教のそれがほとんど同じというのの大きさ



な特徴だ。

鎌倉時代になって文字は武士階級に普及する。江戸時代になると武士だけでなく農民、町人、あるいは当時の「穢多」身分「非人」身分などのリーダー達がそれを活用する。また寺子屋も出来て、都市を中心に大衆の間に広がる。しかしそれでも社会の大多数は文字を使わなかった。

鎌倉時代になって仏教界に一大変革が起る。それはさまざまに語られているが、その変革を文字を持つ者から持たない者への仏教の広がりと考えることが大きな妥当性をもつだろう。つまりそれまでの国家仏教から大衆仏教への変革だ。

このような変革のとりえ方はけっして新しいものではない。ただ私がここで言いたいのは、文字を持たない大衆が、文字文化としての仏教からは「新開拓地」であつても、またそのために文献上の教学を語るよりも「ナムアミダブツ」と唱えるだけで救われる（これは仏教の口承文化といえる）と説くことに成

功したとはいえ、彼ら大衆はその時すでに、非常に豊かな、高水準の文化を持っていたことだ。

そのころの豊かな大衆文化は今でも多い。作庭や生花、建築・木工・石工の文化。あるいは予祝芸や門付芸、大道芸、舞台芸など。そしてもうひとつわすれてはならないと思うのは、そのころすでに日本の大衆、つまり農・山・漁村で働く人たちは、土地や山や海を対象とした宗教をもっていたことだ。この宗教をこの小論の中ではとりあえず「呪術」と書いてきたのであるが、この呪術的宗教は鎌倉新仏教といわれるものが大衆の中に入る前から、そして今になって考えたとその後も、しっかりと根を張っている。日本の仏教が呪術を克服出来なかった原因はこのあたりにあるかも知れない。

三、仏教的悟りを語る芸

ともあれ法然が生きた時代に仏教の大衆化が起ったことはたしかだ。鎌倉新仏教と呼ば

れるものだ。その大衆とは文字を持たなくてそれまで国家仏教から無視された人々だ。その人たちに「ナムアミダブツ」と唱えることで救われると説くのは一種の口承文化だろう。

このような意味での仏教の「口承文化」は江戸時代にどうなったのだろうか。寺檀制度によって制度化された仏教はその制度で「口承文化」を失ってしまうと思うのであるが、しかしなおかつ「仏教の口承文化」をつづけた人、僧侶がいた。その一部が前に書いた「願人坊主」たちだ。彼らは寺檀制度に囚われていない。だから自由だった。しかし、だからこそ彼らは「念仏聖」とか「乞食坊主」などと差別された。また差別されたがゆえに彼らは主体的に被差別者と共に生きた。この事例から言えることは、寺檀制度を否定してなお大衆的に仏教で生きようとした者は被差別者になってゆく傾向なのだ。

同じように、被差別者になってゆく仏教者がいた。「放下^{ほうか}」と呼ばれた人だ。彼らも仏教と共に芸能を残した。

「放下^{ほうか}」は仏教的には二つの意味をもつようだ。一つは教団、その共同体から追放された僧。もう一つは禪宗で「ほうげ」と読み「悟りをもった雲水」というもの。

しかしこれを社会的に見ると「放下」は中世の非人身分であり「放下僧」は平民の僧となる。以上のような複雑な性格をどのように整理するか今後の課題なのであるが、ともかく彼らの存在が複雑で、社会規範でははかれない者であったのはたしかだ。

愛知県新城市の「放下踊」は毎年盆に演じられる。いつ発生したか正確でないが中世の「念仏聖」からという説がある。余談になるが徳川家康の先祖はこの地域で「念仏聖」だった。中世非人としての「放下」は能楽などにも登場し禅問答をする。その中で「放下とは「我が法体は教外別伝にしてただ一葉のひるがえる風の行方と御覧ぜよ」という文句がある。このような仏教的悟りが大衆の中で「念仏聖」「乞食坊主」によって語られたのではないか。

(つづく)

心病与藥

大井潔空

「阿弥陀ほとけ五劫に思惟して、たて給ひし深重の本願と申すは、善惡をへだてず、持戒破戒をきはらず、在家出家をもえらばず、有智無智を論ぜず、平等の大悲をおこして、ほとけになり給ひたれば、たゞ他力の心に住して念仏申さば、一年須臾のあいだに、阿弥陀ほとけの來迎にあづかるべき也」

『念仏往生要義抄』

『歎異抄』で名高い、悪人正機説も、最近では親鸞聖人が初めて説かれたものではなく、法然上人から伝えられたもの、という説が定まりつつあるようです。確かに、『法然上人伝記』（醍醐本）には、法然上人のお言葉として「善人なお以て往生す、況や悪人をや」とございます。もともと、この解釈については議論もあるのですが、いずれにしても、法然上人がおっしゃったことは確かなようですし、その他の本にも、「黒谷の先徳より、御相承とて…」と悪人正機のこと伝えられておりま

す。では、悪人正機を最初に説かれたのは法然上人なのか、と申しますと、どうもそうではなさそうです。

『選択集』第一章に、新羅の僧、元曉の『遊心安樂道』からの引用として「浄土宗の意は、本凡夫の爲にして、兼ねて聖人の爲にす」と著されておられるところをみれば、悪人正機説は、すでに古くからあったように思えます。無量寿經に「設我得仏十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念…」とございますように、誰でも、阿弥陀さまのご本願を深く信じ、極樂浄土に生れることを願って、たとえ十遍でもお念仏申すならば、間違ひなく往生させていただけるのですから、それが善人であろうと、悪人であろうと問題ではありません。ただ、阿弥陀さまのご本願に依らなくても、自らの力でさとりを得る可能性がある善人に対し、阿弥陀さまのお力以外には、どのようなして、も生死を離れることができない悪人としては、受け取るご本願の重みが全く異なります。「罪

悪生死あくしうじの凡夫ぼんぷ、十惡五逆じゅうあくごぎやく、戒定慧かいぢやうえき三学さんがくの器うつわに非ずあら」と思ひ定めた、いわゆる惡人には、念仏往生おんじやうしやうのご本願は、「惡人のためにこそ立てられた願がんである」と受け取れるのです。

先ほど、善人であらうと、惡人であらうと申しましたが、これに異議を唱えられる方もあらうかと思ひます。なぜなら、「深く信じる」ということは、阿弥陀さまのご本願を深く信じるその前に、「自分は出離しやうりの縁のない罪惡生死の凡夫」と深く信じることだから善人であらうはずがない、というものです。まことにもつともな議論ですが、往生する者が全部惡人になつてしまうと、ご本願の正機は誰か、という話もできなくなつてしまうので、ここでは一応、お念仏申して往生できる人の中に、善人も含めておきたいと思ひます。

法然上人は善人正機説であつた、と主張される方もおられます。つまり『黒田の聖人へつかはす御文』(二紙小消息)の中の「…罪人なほむまる、いはむや善人おや…」とか『大

胡この太郎実秀さねひでが妻室のもとへつかはす御返事」の中の「…三宝滅尽の時なりといへども、一念すればなを往生す。五逆深重じふぎくしんじゆうの人なりといへども、十念すれば往生す。いかにいはむや三宝のまします世に生まれて、五逆をもつくらざる我等…」とか『十二箇條の問答』の「…惡をも捨て給はぬ本願ときかんにも、増して善人をは、いかばかりか悦び給はんと思ふべき也…」あるいは『往生大要鈔』の「…広く通ずというは、五逆の罪人をあげて、なを往生の機におさむ、況や余の輕罪をや、いかにいはんや善人をやと心得つれば、…」とか、例はまだまだ挙げられます。これらをもつて、法然上人が善人正機の思想の持ち主であつた、と主張されているようです。いまま少し、これについて考えてみたいと思ひます。

『黒田の聖人…』『大胡の太郎…』これらはともに、お手紙でございます。法然上人が惡人正機のお考えをお持ちであつても、手紙の相手に對し、そのようにお述べになられたでし

ようか。ましてや、大胡の太郎の妻室へは、はるか関東から、わざわざ使者を上らせて、お念仏についてお尋ねした事へのお返事として書かれたもので、いきなり悪人正機の話が出て来るとも思えません。また、たとえ本願の正機と言われようが、あからさまに悪人呼ばわれされれば、だれしも気持ちの良いものではありません。

『十二箇條の問答』では、「凡夫の常として、心に悪い思いが生ずるものですが、人はこの悪い心のままに行動するべきでしようか」という問いに答えられて、「増して善人をば……とおっしゃいました。

ご法語も、どういう状況のもとで話されたのか分かりませんと、法然上人の真意を読み違えるおそれがあります。しかし、善人正機の表現が数多く見られるのも事実です、これら全ての場合に、本心である悪人正機のお考えを偽って、善人正機を人々に語られたとも思えません。つまり、法然上人のご法語

には、悪人正機と善人正機とが混ざっているのです。

よく、悪人と罪人の違いについて論じられます。悪人とは、自らの力では悟りを得ることができない、と自覚する人で、主観的な立場であり、罪人とは、十惡五逆の罪を犯した者で、客観的な立場をとるので、この両者は異なっている、というものです。厳密に申せば確かにそうなのでしょう。しかし、ご法語に見る限り、法然上人がそこまで厳密に言葉を使い分けておられたともみえません。ましてや一般の人々が、悪人と罪人との違いが分かっていたとは思えません。

善悪双方を説く法然上人の思想は、未成熟未徹底な思想だ、とおっしゃる方もおられます。はたしてそうでしょうか。もう少しご法語を見てまいりたいと思います。

武藏の国の御家人、甘糟の太郎忠綱の「われらのごときの罪人なりとも、本願を頼みて念仏せば、往生疑ひなき旨」の問いに「弥

陀の本願は専ら罪人の為ならば、罪人は罪人ながら名号を唱えて往生す……と仰せられました。

熊谷の次郎直実くまがはに初めて対面されたときには「罪の軽重をいはず、ただ念仏だにも申せば往生するなり、別の要なし」と仰せられ、それを承った直実が、さめざめと泣き出したのですが、法然上人がその訳をお尋ねになると「手足をも切り命をも捨ててぞ後生ごしやうは助からんずる」とでも、お聞き申すことと思っておりましたので、余りにうれしくて泣いてしまいました。と直実なおみねが申しますと、上人は、真実が本当に後世ごせを恐れる者と見てとつて「無知の罪人の念仏申して往生する事、本願の正意しやういなり」とおっしゃいました。

法然上人が四国へご流罪になった折り、室の泊やちで遊女を導かれたときは「……この罪業おもき身、いかにしてか後の世たすかり候らん……」と訴える遊女に、誓願をたて給へる其の中に、女人往生の願あり。然則女人はこれ本

願の正機也……」とおっしゃいました。

また、ある人の問いに答えて「弥陀如来の本願の名号は、木こり草かり、菜つみ水くむ類なひごときの、内外ないげともにかけて一文不通いちもんふつうなるが、唱れば必生かならずと信じて真実にねがひ、常に念仏申もつを最上の機とす……」とおっしゃつておられます。

その当時、法然上人がお念仏を勧められた人々の全てが、深く自己を見つめ、自身が罪惡生死の凡夫であり、常に没めつし常に流轉りゅうせんする存在である、と思い定めていたとも思えません。むしろ、多くの人々は、法然上人の尊さに触れ、有り難く、仰せのままにお念仏申したのではないでしょうか。もちろん、自身の罪惡の重さに悩み苦しむ人々も多かった、と思います。自ら罪人と認め、その罪におののく者には「あなたのような罪人こそ、ご本願の正機」だから絶望しないように、と希望をお与えになりました。このお言葉をたまわった人々の悦びは、いかばかりかと思われま

す。「私こそが、ご本願の正機だ。阿弥陀さまのお救いの誓願は、この私のためにある」おそらく歓喜の涙にむせんだことでしょう。

「念仏の一願に万機をおさめて発し給へる本願也。ただ、こざかしく機の沙汰をせずして念仏だにも申せば、皆悉く往生する也」

——『十二問答』（禪勝房との問答）——

お念仏申す全ての者が、阿弥陀さまのご本願の正機でございます。これまでご本願の正機について、あれこれ詮索してまいりましたが、まったく愚かなことでございました。

ちようどお釈迦様が、それぞれの機根にあわせて、さまざまに法をお説き下さいましたように、法然上人は、その一人ひとりの、心

の内の思いを思いやって、それぞれにお念仏の教えをお伝えになりました。

「あなたこそ、ご本願の正機ですよ」

法然上人は、学者である以上に、大いなる伝道者でございます。ご縁を結ばれた、それぞれの者の胸に希望のとしびを灯し、一人ひとりを阿弥陀さまの真正面へと向かい合わせてゆかれました。

今日、法然上人のお言葉を戴く私たち、「私こそ、ご本願の正機」と思い定めて「善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して」共に往生浄土を願おうではありませんか。

（静岡掛川市・相伝寺 住職） 十念

山人の
達人

山本勝之

(フリーライター)

もともと、散歩は嫌いだ。今でもそう思っている。ヒマがあるなら家でねっ転がって、本でも読んでるほうがマシと思ってる人間なのだ。

仕事でとか、誰か人に会いにとか、コンサートに出掛けるとか、本やCDを買いに行くとか、何か、出掛けるとっかかりがあつて、ようやく重たい腰をあげ「あつ、時間に遅れてまうぞ、こりやマイッタ」とセカセカと行く。ま、目的に向かつてというか、そのとっかかりに対して。実に、直線的に。

だから、家を出てから駅まで15分ぐらい歩くんだけど、その間、いろんなものがあるはずなのに、目に飛び込んで来てるはずなのに、ほとんど何にも残らない。せいぜい陽の光の具合とか、アスファルト道路のザラついた表面とか、自分の靴先とか……。

いや、別にずっと俯いて歩いてるわけじゃないよ、僕は。すれ違う人や車だって、ちゃんと見てますよ。だってぶつかったら危ない

もの。

ただ、それらの印象は、すれ違ってから経過する時間よりも速く、霞のなかにぼやけるようにして、消えていく。

で、人にあったり、用事を済ませたりしての帰り道が、散歩といえど散歩だったのかなあ、と今は思う。

夕暮れ時、特に知らない街がよろしい。知り合いのなかには、いつも入浴セット（タオル、石鹸、シャンプー）をカバンの中に入れて持ち歩いて、初めての街ではまず銭湯に入るなんて奴もいますけど、僕はいつもカバンの中で石鹸カタカタ鳴って神田川なんて生き方たえられませんか、しない。

しかもそいつときたら、まだ20代のくせに都内どこへ行くにも路線バスに乗って、適当な街で降りてまず銭湯と、まるで田中小実昌みたいなジジムサイことしやがって。20代で、どこで聞きかじったか、コミさんの生き方、などと気取ってるのが気に入らねえ。

20代で枯れるなつちゅうの、尖んがれ！「銭湯？ケッ、くだらねえ！」と唾吐け。俺なんて20代の頃は銭湯行く金もなくて、アパートの小さな台所の流し台に無理やり身体押し込んで、風呂にしてたぜ、パンクだったから。というわけで僕の場合、いきおい表通りを折れて、横町、路地へとさ迷いこむ。

八百屋、魚屋、惣菜屋、地元の人々の活気のある生活が感じられる商店街、そんななかに混じってぼつりぼつりと灯のとりはじめた赤提灯、看板、縄暖簾。

一応用事を済ませたあとなので、ぶらぶらとゆっくり見てまわる余裕もある。魚屋のオヤジの口上がみごととか、惣菜屋のオカミさんはいまにもブチ切れそうとか、そんなものをオカズに居酒屋の品定めにかかる。

外から見ての佇まいはどうか、暖簾の年季の入り方はどうか、暖簾の下、真っ白な盛り塩があつたりすると、やはりうれしい。暖簾をちよつと上げて、引き戸上部の素通しがら

スから、店内をチラと観察する。あくまで「チラ」である。ここで主人と目が合っちゃったりすると、もう入れない。なんだか自分が胡乱な奴にしか思えなくなるから。

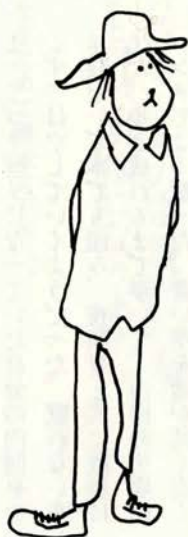
で、値段とか、店の活気とか、主人の無愛想さとかの総合的判断で「ブラリ」と入ったりしてたんですが、あかんね。初めての店、しかも一人でというのはどうも落ちつかない、腰が座らない。料理も酒も値段も店の雰囲気も申し分無し（自分の勘だけを頼りに飛び込みで入った場合、十軒に一軒こういう店に当たればいい方か）なのに、注文したビールをセカセカと飲み干し、料理を突つくと、手持ち無沙汰というか、自分の居場所がない。最初のうちは置いてあるスポーツ新聞を読んだり、テレビを眺めたりしてゴマかしてたんだけど、こういうちよつとした冒険をするのにも自分の生活が向いてないことに、ある日はたと気がついてしまったのだった。

で、そういう無理は止めました。身体にも

心にも悪い。もともと犬のような性格なんですよ。行った道をそのとおりに帰ってくる、帰りに地元の行きつけの店でチューハイ二、三杯飲んでナゴム、安心する、くだ巻く帰って寝る。

そんな性格の私がなんで散歩なんぞに目覚めたかという、一昨年の晩春、妻と別居した。それと同時に10年来付き合ってた女にもミゴトにふられた。毎日明るいうちから酒を飲んで、肝臓がブツ壊れた。日焼けしたような赤黒くムクんだ顔を、ある朝鏡のなかに発見してアセった。鼻血が突然ドクドクと出て止まらなくなった。布団一枚血だらけにして捨てた。同時に仕事がうまくいかなかった。とりあえず仕事を整理し、最小限の荷物を作り、田舎に逃げ帰った。

名目上は「そろそろ雑誌の雑文書きにも見切りをつけて、纏まった作品を書くため」の帰郷だったが、東京で失敗して何もかも失っての都落ちだと、自分では判っていた。



1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

$$T = T_{\infty}$$

たき道も

112
P
h
x
o
..

子午

母親と二人の生活が始まった。母親に隠れて朝からビールを飲んでゐた。手持ちの金はすぐに底をついた。収入のあても仕事のあても無かった。そんな状態で、なにひとつ書けるはずもなく、どうにかこうにか日記をつけるあとはワープロの前で石のように凝固して夕暮れがくるのをひたすら待っていた。誰にも会わず、出掛けず、毎日、話す相手といえば年老いた母だけだった。酒を飲んでも酔えなくなっていた。同時に不眠症が加わった。あつ、暗い奴ちゃ！　もうやめにしましょう、とにかくいろいろあつた。四十過ぎて、初めて私も人並みに悩み、苦しんだといったところでした。

そのころから散歩の習慣が始まった。犬のように決まった場所、決まった順路を直線的に結ぶのではなく、目的もなくブラブラと、でたらめに、生まれ育った町をずいぶん歩いた。遠い記憶や、繰り返し見る夢のなかの町並みと随分変わってしまっていたり、子供の

ころ遊んだ山がそっくり無くなっていたりと驚きは尽きなかった。ささいな驚きが、煮詰まってゴリゴリになっていた自分の内側を少しずつほぐしていくようだった。眠れない夜は寝ないで本でも読み、夜明けと共に散歩に出た。歩き疲れるまで歩いて、海岸の突堤のベンチでよく眠った。青い空を鳶が高く高く輪を描いて飛び、ピーヒョロと鳴くのを「いいなあ」と思えるようになっていた。

で、今は再び東京で妻と同居している。

「悩んだり苦しんだりって、たいがい人は人を変えるものだけど、アンタはちつとも変わってない、どーしようもないわ」と彼女は呆れている。もつとも身近で、長い時を一緒に過ごしてきた人の言うことである、間違いあるまい。たぶん僕はちつとも懲りることなく、変わることもなく、相変わらずなのだと思う。ただしというか、とにかくというか、散歩の習慣だけは残った。

七年前「家にいないお父さんの代わりに」と、妻が飼った犬に引かれていく。以前はイヤイヤながら、妻に頼まれた手前仕方なく、家事のひとつをこなすように、こっちの都合で犬を引きずり回すように短時間で済ませていた散歩が、まるつきり変わった。文字通り犬に引かれていくのだ。

犬の散歩は直線的で、行つた道をそのまま帰ってくると言っただけ、どうやらそうでもないらしい。犬に散歩の主導権を預けてしまうと、犬も4〜5種類は散歩のルートを持っていることがわかってくる。雨が降った後に必ず取るルートつてのもあるし、新しい、未知の領域に踏み込むときは、しばし逡巡したあと、上目遣いに飼い主に同意を求めたりもする。

あたしや、同意もしなければ否定もしない。犬に引かれ、他人の庭の花など眺め、ポケットの小銭チャラチャラ鳴らし、煙草一箱と缶ビール一本買って帰るのだ。

好評
発売中!!

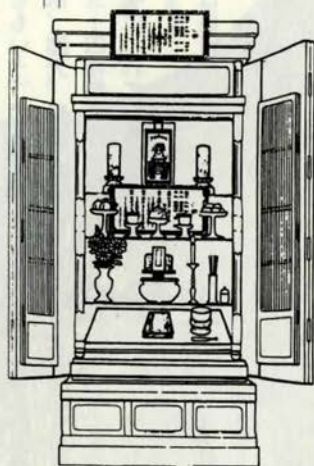
お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。

堂内用、境内地用等、寺院仕様もございます。



寺院名が入ります。(版代別)



定価：大 (32.0×18.3cm) 735円／小 (27.3×14.2cm) 420円

注文・問合せは

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

藤井實應著 ■ 藤井正雄編

一筋の道を求めて

— 祖師との出会い、父と子の人間像 —

A 5判・並製

本文250頁

定価2,300円〈税込〉

●
株式会社文化書院

千代田区飯田橋4-5-4

102-0072

TEL. 03-3261-0480

FAX. 03-3261-0479

涅槃会は二月十五日。釈迦入滅の日に行われる法会です。

皆吉爽雨

涅槃会に吟じて花鳥諷詠詩

川端茅舎

いきなり呑気な句ですが、涅槃とは煩惱を去ること。寺々に掛けられた涅槃図の下、すべての自然、あらゆる生命について諷詠することまた良し、ということでしょう。

涙痕のごと蝶を描き涅槃の図

涅槃に入ったお釈迦さま（よく寝釈迦などともいう）のまわりに多数の門弟、諸天、鬼神、鳥獣、虫魚等五十四種類の衆生が集まって悲嘆にくれている図をよく見えています。

翌十六日は西行忌

きさらぎの雲は白しや西行忌

五十崎古郷

全国を行脚し旅に生きた西行

涅槃会

法師に呼びかけるような一句です。西行はかねてよりお釈迦さまの涅槃の日のあたりで死にたいと願っていたのです。

有名な和歌「ねがわくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ」がまさにこのことで、果たして、まさに願い通りになったのです。現代の季節感では首を傾げるかもしれませんが、花とほもろん桜のことですが、陰暦では二月中頃に桜が咲くことがあったということです。

浄土の広場

FORUM

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●去年今年
こぞことし

〈特選〉

病室のラジオの中の去年今年 矢野玉枝

●ラジオであることがこの句に余韻を与えている。聴覚で感じとる去年今年であるからだ。病ある身に直接響く。鐘の音はもちろんのこと、初詣の雑踏の音さえ、厳肅に感じている作者が想像できるではないか。

〈佳作〉一卷の経巻くうちに去年今年

残間善行

内陣の花凍りいて去年今年

嶋田蓮子

風終わる道に果てあり去年今年

海道 豊

●寒紅

〈特選〉

寒紅を一途にひきて歳かさね 大場 清

●歳かさね、とは言っても単に老齡となっているわけではない。一途にひきて、という表現に自信と力強さを感じる。作者の奥さんを

新宮不等号・選

(今月、増田河郎子さんは超ご多忙のため選は代行を立てました。編集部)

吟んだ句であろうか。ただ句の勢いは作者自身
の生命力の表われと感ぜざるを得ない。

〔佳作〕寒紅は花の名でなくおちよぼ口 近藤十四郎

老妻の寒紅ここぞ我無言 斎藤芳樹

寒紅を引く指先の母に似て 三井順子

●自由題

〔特選〕

一湾を大きく抱きて青岬

●人は岬の見える風景を好む。焦点が定まる
からであろう。構図上、安定感を生むのであ
る。この句では、更に自然の抱擁力と厳しさ
の双方を感じとらせている。のびのびとした
リズムを青岬できちんと止めている。

〔佳作〕大小の菊供へある父母の墓 上野明達

ギヤマンの壺照らしをり初日かな 甲田八重

輪飾りや外孫かくも長き逗留 相崎智也

細田初枝

●去年今年

何となく只何となく去年今年
去年今年節目を告げる鐘の音
健康を先ず大切に去年今年
宇宙の夢身近になりて去年今年
仕事持つ身の有難き去年今年
去年今年バリツと音してめくられる
去年今年どういいうわけか繋がりぬ
子には子の孫には孫の去年今年
船内に螢の光去年今年
塊となつてガツンと去年今年
去年今年つなぐ地面が固くなる
八から九九から〇へと去年今年
去年今年水面に浮かぶ葉のごとく
去年今年逃げ足速き獣かな
去年今年じんわり吸って脱脂綿
数秒の去年今年なる時間あり
去年今年ただ次の日を迎ふのみ
去年今年曜日の観念薄くなる

●寒紅

寒紅を千両万両に見つけたり
梅林の紅梅映えて招きをり
寒紅や祈りを込めし寺参り
古妻の寒紅濃かり子の婚に
单身赴任の夫恋ひ寒紅強く刷き
寒紅やあさつてばかり見て生きる
寒紅やどつか少しは綺麗でしよ

中島一子

上野明達

細田初枝

細田初枝

結城伸光

山下泰孝

柴田隆義

伊原亮

玉本麦秋

見城寛

下条由加里

大木未知

進藤亜矢

四方遼

仙波一周

島崎悠一

安西麻衣子

中島一子

上野明達

大場清

細田初枝

細田初枝

川島早苗

吉行富美子

寒紅の娘千両役者なり

寒紅や路地裏に立つ下駄の音

孫娘寒紅少し派手になる

寒紅の軍団が来る古参道

寒紅懐かし病室にいてテレビ見る

寒紅の微かにワイングラス立つ

マフラーの中に寒紅抱きとりぬ

寒紅をただ見るだけの老眼鏡

●自由題

初霜と妻乗せてゆく車椅子

修羅となり闇を掛け抜く大野分

一と息に抜く大根の太さかな

顔寄せて墓碑名探す義士祭かな

唐津碗の利休の侘や初時雨

祥瑞の呉須鮮かに新春の床

初釜の古式豊かに榮かな

京の町炎ともえて秋更衣

煮え立つて鍋いっぱいのせりなずな

七草や青きテントに人の影

年賀状筆の先だけおめでとう

初詣兼ねてデートの眠い顔

無人機の裏まで届く初日かな

元旦の雑踏にいてひとりなり

注連飾り見て泣き出した子どもたち

九々とお尻の並ぶ歌留多取り

晩成といはれ今年も寝正月

芦名宗一

前田光芳

安藤諒

会田英道

高品幸子

弓谷美紀

欠畑文昭

柴崎亮一

上野明達

細田初枝

細田初枝

細田初枝

野口善雄

野口善雄

野口善雄

野口善雄

甲田八重

神部翠

神部翠

松井祐子

遠藤久

島神涼子

桜木謙三

酒田基成

袖谷典之

富島愛子

第四回 浄土誌上句会のお知らせ

季題
余寒

彼岸前

自由題

〆切・二月二十日

発表・『浄土』四月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

●いずれの題とも何句出しても可

●特選各1名・佳作各3名

応募方法

葉書に俳句（何句でも可）を書き、住所、氏名を必ず忘れないで下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

句集 「木に登る」
を読んで

大畑 等

春だなあ春てすねえと連添へる 仁良

児玉仁良さんの句集「木に登る」は不思議な温もりがある。それは何なのかは後廻しにして、とにかく句を観賞して下さい。

永き日や二人一匹一羽ゐる

年金を二つに割つて花を見に

鬼やらひ妻にまかせてしまひけり

老夫妻と、猫（又は犬）一匹、小鳥一羽を飼っている家族である。桜に浮き浮きする作者、節分の豆撒きは奥さんにまかせて自分は炬燵の中、奥さんの「鬼は外、福は内」を楽しむように聞いている。そのような家族が目に浮かぶ。友が来る。

水打つて葺敵さそふ備へけり

なつかしき豆腐屋が来て湯豆腐とす

そして今は亡き者を想う。

母の名を仙と言ひます梅の花

あるときの母の香水忘れまじ

あねおとと黄泉のふらここ漕きつげり

夕焚火亡き誰彼が手をかざす

嗅覚に刻み込んだ母、あの世のぶらんこを漕ぎつぐ姉と弟。空襲で亡くなったのだらうか。焚火に寄り来る者は戦友か。季節と風物は児玉さんの心情としつとりと合わされる。

夕焼は空戦の色はるかなり

本籍は名のみ下町春しぐれ

本籍に身寄りなかりしところてん

傷心、感動、痛切、寂寞、それぞれがそれぞれに児玉さんの揺るぎない生である。

秋風に瘦軀清拭されるたり

白光のまま白鳥菩薩かな

とまり木のなくて狂ひて揚雲雀
秋の蟬つまつき啼いてそれつきり

作者の心情の吐露である。二句目の「白鳥菩薩」と言い切るところなどは、感動の息遣いさえ伝わってくる。

私は児玉さんを全く存じあげていない。句集の児玉さんしか知らない。それにもかかわらず、児玉さんから充分に挨拶されたと感じてしまった。旧知の句友から句集をいただくと、手紙のように感じる時がある。児玉さんの句集「木に登る」にそれと同様の感じをもってしまう。

句集は続く。児玉さんのユーモア溢れる句を並べてみる。

マヌカンの鼻の上向き鳥雲に
私はぬと言わぬが梅雨の納税書
春風にしては固いぞ道祖神

七夕竹誤字の願ひも適ふべし
威し鉢撃たるる雀なかりけり

大仏は猫背におはす鯉雲

夏鵜の声色つかふとは笑止

一匹も殺してをらぬ蠅叩

薄給のころの雛でありにける

ただただ読んでいけばよいようだ。付け加える言葉は句のユーモアを壊してしまう。ただありますよ。

おつかあもリレーの一人運動会

いーしゃーきーもーはるかなものを呼びひるたり

石焼いもの句などはユーモアと一言でくれない揺かりを感じてしまう。声の質さえ聞きとれるし、何かを恋う心情も読みとれる。

自画像とする夏瘦を写しけり

これよりは食ふべからずの四月馬鹿

一茶的な面白さ。寂しさも一つの心境と突き放している。後の句は「無職」との前置き

が付いている。そして次の句などは、世間を熟知している者しか作れないのではないかと驚嘆してしまう。

滝見茶屋別れ話の聞えけり

滝を見ないでする別れ話。ヒソヒソ声か実に重苦しく作者の耳に届く。

喜びに溢れた句。

桜さくらサクラのほかは思はざる

これはこれは京の器の花菜漬

上気した顔（御面識はありませんが）が句の中に出て来る。

次に「妻病む」との前置きのある七句全部を読んで下さい。

乳房切る妻の観念青葉木宛

祈りても手術変らぬ夜の短か

短夜や乳房失ふ妻に添ふ

何もしてやれぬ夫なり蟻地獄

切りとりしものに瘡なし聖五月

死神の失せし顔なり葛桜

約束の郭公来たり妻戀ゆる

悲しみから喜びへ、児玉さんの心情がひしひしと読者に伝わって来る。波立つ心を定型によつて押えているからであらう。七句目の「約束の郭公」に一筋の希望がかなえられた喜びと感謝の心を感じる。宗教的な雰囲気さえあったよう。毎年来る郭公を「約束の郭公」と表現した作者に敬意を表さずにはいられない。

虹のはし掴みなくなり木に登る

右しなの左は読めぬ秋の暮

一句目は句集の題となった句である。二句目は味わい深いとても好きな句である。

二句とも児玉さんの句境をよく表わしてい

ると思う。未だ少年のような柔らかな心を持った児玉さんと円熟した児玉さんを見る。「木に登る」というおよそ句集らしくない題を付けた児玉さんは前者であり、上質の水のような俳句「右しなの」の児玉さんは後者である。二つの中心をもつ楕円構造の中から豊潤な句が生まれ出る。たつぷりと堪能させて戴きました。さて児玉さんの句集に、いただいた手紙のように温もりを感じるのは何故なのだろうか？あとがきで児玉さんは次のように書いている。

底の割れた句もあるけど、捨てがたい面もあるので敢えて収載することにした。

御謙遜であらう。俳句の骨法を熟知している児玉さんは「緩み」さえも手の内のものとする。「軽み」があれば「緩み」があってもいい。そこに、「木に登る」を一通の手紙とさせた秘密があるように思えてならない。

☆まちがいは7ヶ所あります。



「私、藤井の新刊が出ました。「まんがでおぼえる囲碁入門（山海堂）」という本です。書店で注文してね！」

まちがいをさがし

答えは58ページにあります。

●J・FORUM(浄土フォーラム)

毎号、ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー「J・FORUM(浄土の広場)」。

俳句や短歌などのほか、書評や随筆、詩、身近な出来事や情報などを、左記の要領でどんどん応募下さい。

1 随筆・短歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内。
2 俳句・短歌・川柳など…四首まで。

3 その他、本誌の掲載記事に関するご意見やご感想など…適宜。

いずれもタイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。

また、原稿は返却致しませんので、必要な方は事前にコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈致します。

●新規会員募集

当会では、随時会員を募集しております。

お友達やお知り合い、寺院の会員の方は檀信徒の方々にも、是非法然上人鑽仰会への入会、そして「浄土」の購読をおすすめ下さい。ご連絡頂ければ、見本誌、パンフレットをお送りいたします。

●新規会員紹介(敬省略)

購読会員

東京	葛飾区	慶円寺
神奈川	大和市	清水鶴信
富山	高岡市	極楽寺
東京	港区	花岳院
埼玉	岩槻市	願生寺
東京	江東区	一言院
東京	足立区	松山久
東京	世田谷区	須田 暁
埼玉	吉川市	宗円寺
千葉	野田市	浄法寺
東京	武蔵野市	生田 武
滋賀	志賀町	田谷正陽
長崎	長崎市	副島悦夫
一般会員		
東京	文京区	大泉寺
神奈川	小田原市	大経寺
東京	新宿区	誓閑寺

後記



編集

夢見るはそのときだけの初日かな

岱潤

今年の初日のすばらしさは多くの人が経験したことだろう。その閃光の鋭さはいつまでも残るはどだった。そして初日の出を見ているその瞬間だけは、明るい夢を心に抱き、希望に胸が膨らんだのだが、少し時間がたつともういけない、今年はどうも明るい気持ちになる要素が何もない年に思えてきた。来年ならば二千年ということもあり、さぞや活気づくことだろうが、何かそれまでの一年間をじっと耐えなさいと言われているようで、忍辱の心を鍛える年としか思えないのは、私一人だけではあるまい。

大企業に勤めた友人からは、リストラの話が話題になり、小会社を経営する友人からは、同業者の倒産のニュースばかりが問題となる。皆明日は我が身だという心境で、酒にも酔えない新年会が続いた。

これからはインターネットどころかパソコンも英会話もできないような者は、前時代のお荷物的人間として扱われてしまうのだろうか。親に対して電話も使えないのかと笑っていた自分が、もうすでに子供たちから、携帯電話の扱い方を教わり笑われていることに驚かされる。

時代の中で価値観が音をたてて変わっていつてしまっているような錯覚に襲われる。小学校で、「なぜ人を殺してはいけないのですか」の問いに先生が答えられなくなっているという。人間として生きる上で、何が大事なもののなか、そんなことすら見えなくなってしまうのだろうか。

寒さ極まる今日この頃である。

(岱潤)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

齋藤晃道

村田洋一

井原法正

佐山哲郎

間川彰道

編集顧問

大室了晴

浄土

六十五巻二月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十一年一月二十五日
発行——平成十一年二月一日

発行人——真野龍海

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 シー・ティー・イー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三三三三七八 六九四六

FAX〇三三三三七八 七〇三六

振替〇〇一八〇八二二八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害ならせ



民衆近し、静かに



足元注意



踏切あり



経業口



破 壊



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわるな



われ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安 心 と 安 全 を お 届 け す る



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

ご注文・お問い合わせは
法然上人鑽仰会まで
電話:03-3578-6947

お仏壇用
宗旨布教額も大好評
発売中

私たちの宗旨

名稱淨土宗
宗祖法然上人(源空)
(信長三年) 應永二年

開宗 承安五年(貞治七年)
本尊 阿彌陀佛 兼善念佛
教義 南無阿弥陀仏
修持作法 念ふ、唱へ、観る、
す。又、坐し、臥し、歩み、
するに、いつでも、心掛けて、
念ふこと、最も大事とせよ。
此の宗旨は、
唯、衆生を救ふため、
方便として、説かれたものである。

お経
《華严》《法华》《无量寿》
《阿弥陀经》《楞严》
《圆觉》等經、并諸聖賢の
訓示を奉じて、
三寶歸依より、修行すべし。

菩提寺 奈良・東大寺西光寺

私たちの宗旨

名稱 淨土宗
宗祖 法然上人(源空)
開宗 承安三年(一二五三)
本尊 阿彌陀佛 無量壽佛
稱名 南無阿彌陀佛
教義 淨土往生 他力本願
お題目 南無阿彌陀佛
五戒 不殺生 不偷盜 不邪淫 不妄語 不飲酒
宗本山 京都・西門外・龍谷寺



遂に
完成

布教用グッズとして
念仏の教えを語るのに
最勝の選択

本堂・客殿に最適 豪華額装入り
(585×465mm)
頒価20,000円(税・送料別)
解説書付き

※お届けまでに四週間ほどかかる場合がございます。